

学問の神様 菅原道真は生涯学習のシンボル？

いわゆる「学習」は、決意を持って始め、苦しみながらも継続していくことで、その先にある達成感や充実感を味わい、成果があれば大きな喜びを見出すことができるものです。一方で、“気づきの楽しさ”を積み重ねていくことで、新たな興味が湧き、楽しいからより深く知りたくなる。そして、そこから新たな発想が生まれ、また新たな気づきを体験する。私たちは、これを「学び」と呼び、この学びの循環を生涯継続していくことを「生涯学習」と捉えています。

「学問の神様」として知られる菅原道真（すがわらのみちざね・845－903）は、中国の歴史と文学（漢詩）を学び優秀な成績を収め、官僚となるための国家試験に合格し、のちに右大臣にまで出世しました。では道真は単に試験のため、出世するためだけに勉強したのでしょうか。いいえ、そうではありません。与えられた教科書をただひたすら読んで勉強することに満足することなく、それによって得られた知識を生かしながら、日常生活での“気づき”を大切にした人ではなかったかと思うのです。道真は11歳の時、先生（島田忠臣）の指導を受けながら、初めて漢詩「月夜見梅花」を作りました。



渡唐天神像(*1)

「月夜見梅花」（月夜に梅花を見る）

月耀如晴雪（月の耀きは晴れたる雪の如し）

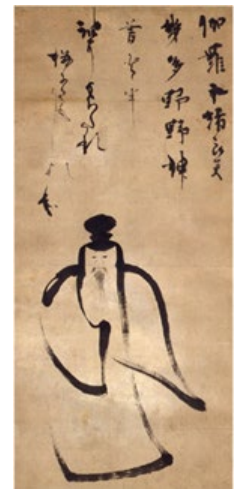
花似照星（梅の花は照る星に似たり）

可憐金鏡転（憐れむ〔＝愛でる〕べし、金鏡〔＝月〕の転じて）

庭上玉房馨（庭上に玉房〔＝梅〕の馨〔＝香〕れることを）

ここで道真は梅の花を星に譬えています。漢詩の世界の常識では、星に見立てられるのは梅ではなく、菊でした。漢詩を学んでいた道真がそれを知らなかったはずはなく、身近に梅の木があったのでしょうか（道真が梅を愛したことはよく知られています）、あえて梅の花を題材としたのです。知識に頼るだけの人ならば、けっしてこのような詩を詠むことはなかったでしょう。月夜に梅の香りが漂う情景も含め、実体験を通じた“気づき”こそが、固定観念にとらわれない斬新な発想を生み出したのです。

成長した道真は多方面で活躍をし、出世を重ねます。しかしそれがライバルたちのねたみを買ひ、讒言（ざんげん＝事実を偽って悪く言うこと）によって無実の罪を背負うこととなり、京都から大宰府（福岡県）に流されてしまいます。失意のまま同地で亡くなったその魂を慰めるため、人々は道真を「天神」として祀り、やがて「学問の神様」として信仰するようになりました。「渡唐天神像(*1)」は、その天神を描いた図で、梅の花を持った天神が中国に渡り、高僧・無準師範（1177－1249）に禅を学んで習得したという中世の伝説に基づいています。



渡唐天神自画像(*2)

つまり、道真は一生涯どころか死んだ後まで学びを続けていた、そのように人々は想像していたのです。まさに道真は「生涯学習」のシンボルと言うべき存在ではないでしょうか。

*1「渡唐天神像(ととうてんじんぞう)」室町時代・15-16世紀 中国風の仙冠・道服を身につけ、梅の一枝を携えた天神像。天神が中国で禅を学んだという伝説に基づくもので、肩から提げた袋に、印可の証としての袈裟が入っている。上部の賛は、渡唐天神思想の発展に寄与した愚極礼才(1370-1452)の文章を書き記したものである。(慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)蔵)

*2「渡唐天神自画像(ととうてんじんじがさん)」近衛信尹(このえ のぶただ)筆 桃山時代・17世紀桃山時代の公卿・近衛信尹(1565-1614)による渡唐天神像。頭が「天」、体が草書体の「神」を表す文字絵となっている。信尹もまた道真のような多才の人であり、憧れがあったのだろうか、このような天神像を好んで描いた。(慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)蔵)